H27.10　　太田日歌ちゃんの幼稚園生活のまとめ

本児の入園にあたっては、園内で「責任をもって預かれるのか？」「どのような配慮や支援がいるのか？」など協議を進め、また保護者からのたくさんの聞き取りを行い、私立幼稚園認定こども園・大阪府特別支援教育費補助金の申請をしていただくことをお願いして、２年保育で入園して頂いた。

１クラス３３名、担任１名なので補助を１名付け、個人の負担にならないよう共に援助できる配置をした。本園には看護師はいない。今の現状としては、経験者の担任に新卒のフリー教諭が補助としてついている。

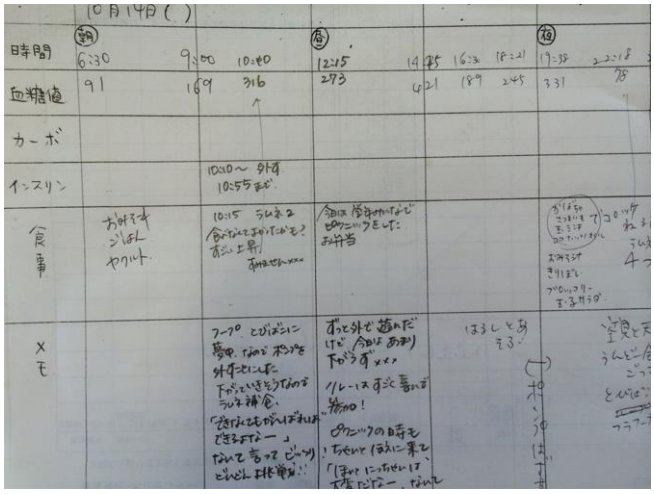
保護者とは緊急の連絡が取れるように携帯電話番号のお知らせをし、食事の量や血糖値の変動を画像で送る時には SNS を利用している。

４月当初の生活の流れ（センサー着用時）　確認→ポンプの血糖値を確認する　測定→実測する

9:00　　登園　門の付近で血糖値の測定（母親）
　　朝の支度を終え、好きな遊びをする
10:00　ポンプの確認（センサーなしは測定）
10:30　片付け　朝の集まり　その後一斉活動
11:00　ポンプの確認（センサーなしは測定）
11:40　給食準備
12:00　血糖値の測定・炭水化物の計量　その後いただきます
　　食後　片づけ　室内遊び
13:00　ポンプの確認（センサーなしは測定）
14:10　降園　血糖値の測定（母親）

◎担任が慣れてきたこともあり、二学期からは測定時間を基本 9:00・10:30・12:15・14:10 にした。

◎担任が慣れてきたことと本児の負担軽減も考え、二学期からは測定時間を基本 9:00・10:30・12:15・14:10 にした。
必要があればその都度測定する。



血糖値、食事の量、その日の遊びの様子、体調や機嫌についてなど、すべてを記録し、降園時に保護者へ渡す。保護者は家でのことを記入し、また　翌日持参されるので、それを見て確認する。

記録項目は、時間、血糖値、カーボ、インスリン、食事、メモ。

＜友達（周囲）の理解について＞

４月当初に紙芝居を用いて、糖尿病についての話をした。「みんなができることは何かな？」ということにもポイントを置いて考える機会をもち、子どもなりの理解を深めた。「しんどそうにしていたら、先生に言う」「おいてあるジュースは薬と一緒やな」「プッチンしている間は、私も一緒に待ってるね」など、４歳なりに感じられていることが分かった。

血糖値の測定や補食も皆の前で行い、本児にとっては必要不可欠なことである事を日々感じられるようにしていった。血糖値測定については傍で見ている子どもも多く、本児の負担にならないかと心配したが、見てもらうことに自信をもち、負担なく行えた。傍で見守る、一緒に数字を読むなどの「してもいいこと」と、測定器具に触る、手伝うなどの「してはいけないこと」を徹底指導し、安全に行えるように十分配慮した。

６月になり生活も安定してきたので、保護者の許可をもらい、保護者全員にも文章で本児のことを伝えた。

◎友達を気遣う気持ち　～にちかちゃんの体のこと～　　６月・参観直前のクラス便りより抜粋

子どもたちからいろいろな話を聞かれていると思いますが、ちゅうりっぷ組みには日歌ちゃんというⅠ型糖尿病という病気をもった女の子がいます。子どもたちとは日々の生活でこの病気にはどんなことが必要なのか？という話をし、私が驚くほど理解をしてくれています。日歌ちゃんが保育の中で行うこととして、血糖値の測定と低血糖にならないための糖分摂取（補食）があります。どちらも日歌ちゃんにとって日常的に必要なことで、周りの友達にも協力してもらい保育室内で行うようにしています。もちろん衛生面には十分に注意し、教師が付き添っていますので安心してくださいね。

当初は「なんか痛そう・・」「かわいそうだね・・」など、特別感や不安感をもっていた子も少しずつ慣れ、「にっちゃん、ここで測ったら？」「一緒に数字（血糖値）見よう」「終わるまで待っとくわなぁ」と、自然な流れになってきています。

視力の弱い人はメガネをかける、耳が聞こえにくい人は補聴器をつける。それと同じでインスリンを出せないから、インスリンポンプを背負い測定や補食をする。みんなそれぞれ違うけれど、少し気遣うことでお互いが生活しやすくなり、関係もより良いものになりますね。せっかく同じクラスになったのですから、親子で糖尿病について少し理解を深めてみてはいかがでしょうか？　特別扱いをするためにではなく、友達のことをわかるために♡

日歌ちゃんにとっての初めての社会（幼稚園、友達）はとても良いスタートが出来ました。みんなのお蔭です。お互いに理解し合い支え合えるクラス作りを頑張ります。

この記事に対しての保護者からの反響は大きく、本児の保護者にとっては少々負担を掛けたかもしれないが、子どもも保護者も皆で理解し関わっていけるようになっている。また、７月にあった保護者集会では母から一言ご挨拶して頂き、保護者・子ども・教師の皆で共通理解が出来、不安なく生活てきている。

＜測定の状況について＞

できるだけ自分で行えるよう見守りつつ、遊びの時間帯にはスムーズに行えるよう手伝うようにしている。遊びの場では負担軽減のために、屋外で実施することもある。遊びの邪魔にならないように、時間や場所は教師が判断し無理なく行えるようにする。

道具類については、幼稚園用の物を準備して頂き、普段は預かっている。必ず予備も預かり、急な対応が必要無いように心がけている。

担任と補助だけではなく、どの教師でも援助ができるように共通理解し、測定に立ち会う経験ができるようにしている。特にフリー教員は全員援助が可能である。

記録については入園当初はノート利用していたが、現在は決まった用紙に書き込んでいる。保護者、教師共に負担にならない程度の物になっている。今後、数字が書けるようになれば昼食時だけでも自分で記入できる用紙を準備していく予定。

準備を手伝うだけで、自分で出来るよ！

＜補食について＞

グルコース（ラムネ）、ジュース（常温保存可）を預かっている。予備も預かっている。遊び中にはグルコースの方が食べやすい。

基本８０を切った時には、保護者相談後に補食をする。徐々に教師自身が慣れてきてからは、様子に合わせて前もって補食をすることで下がり過ぎないようにしていった。

運動直後より、少ししてからの方が下がりやすい、気温が低く天気が悪いと下がりにくい等、徐々に感じをつかみ、補食を行っている。ただし、その時と場合により、思うように下がらないこともあり、正直予測は難しい。

にっちゃんセット　内容は補食用の食品類、測定セット、使用済み針など

血糖値測定セット（念のためにペンも）

＜食事について＞

１学期は 12:00、２学期は 12:30 を食事の時間を決め、その時間にインスリンが出るように設定してもらっている。

炭水化物の量はスケールで測り、保護者に写真で送信。その際、午前中の血糖値の動きや活動内容を記したものも送信している。量が安定し始めてからは、インシュリンの量を増やし、血糖値の安定に繋げている。

今後は食事の計量、記録も自分でできるように援助していく予定。

就学時には自分でインスリンの量の操作もできるように、徐々に操作の援助もしていく予定。まずは自宅で行ってもらっている。

炭水化物のみ計量

120～１５０グラム程度

＜インスリンポンプについて＞

１学期はリュック型、２学期は活動量が増えたので、動きやすいウエストポーチ型に変えた。運動する際には安全に楽しめるように、外して行うことが多い。水遊び、泥んこ遊び、プール等も外している。

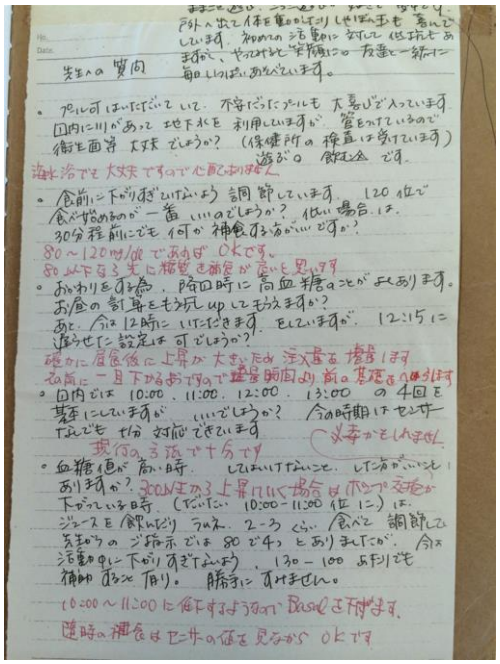
外す時間は１時間程度であれば問題はない。血糖値が低い時には、意図的に２時間ほど外すこともあり、その際は保護者に連絡をしたり記録で報告をしている。食事時間は絶対に外さないよう注意。

外していることを喜ぶ時もあれば、不安を感じてしまうこともあるので、本児の負担にならない程度で、思いを聞きながら共に行っている。操作は保護者のみが行う。

＜担当医　川村ドクターとの関係について＞

４月にⅠ型糖尿病の勉強会に参加し、その後もインスリンポンプ勉強会や意見交換会などにも参加させてもらった。月一回の診察があるので、その際には「生活や遊びの様子」「興味や関心」「質問事項」などを簡単に記入したものを保護者に渡し、質問事項については回答を頂いているので、疑問に感じていることや、お願いしたいこと等、急ぎの場合は電話で聞いていただけるので、大変安心。

病気のことだけを診ていただくのではなく、その時の本児の普段の様子を伝えることで参考にしていただければと考えている。



園からの質問に赤字で回答をくださっている

＜今年度の指導計画＞

目標　個人のねらい

一学期　・園生活に慣れ安心して遊ぶ。
　　・自分で血糖値を測る。

二学期　・自主測定後、数値を教師と確認し読んでみる。
　　・測定のタイミングを感じ、昼食前は自分から教師に声を掛ける。
　　・体調の変化を自分で感じられるよう意識を高める。

三学期　・自主測定後、自分で数値を記入する。
　　・体調の変化を感じ、教師に伝える。
　　・給食前の炭水化物の量を量る。

どんな活動もみんなと
一緒に楽しんでいます

本園にとっても、担任にとっても経験したことのないＩ型糖尿病なので、今後どうなっていくかはわからないがこのように計画を立てた。本児が負担を感じることはできるだけ行わず、意欲的に取り組める方法を考えながら進めていきたいと考えている。

遠足、宿泊保育等、考え試しながら進めていかなければいけない活動も多く残ってはいるが、保護者や担当医の協力を得て、皆と同じ経験ができるよう援助していきたいと考えている。

日によって気温や活動内容が異なるためか、血糖値の変動が読めないことも多く、ＨＩになったり３０台になったりしたこともある。その都度不安を強く感じてしまうが、保護者の理解や協力体制に助けられて乗り越えてきた。保護者から家でのドキッとした時の話を聞かせていただいたり、「私も変動は読めません」「そんなこともあります」と受け止めていただけることで毎回乗り切ることが出来ている。今後も「失敗をした」と思いすぎず、保護者と一緒に見守っていきたいと思う。

勉強会で保護者の皆さんとお話をする機会があり、「保護者が負担を感じることがあっても、それは仕方がない。でも子どもは、できるだけ安全で安心した生活をみんなと一緒に送り、集団での経験を友達と楽しんでほしい」という思いに触れ、大変参考になった。今後も保護者との協力体制を強化し、本児が皆と変わらない保育が受けられるよう支援していきたいと思う。

大阪ひがし幼稚園　宮本涼子

その後の追加資料

入園してから起きた問題

４月　・食後（カレー）、血糖値の上昇でブザーが鳴る。３００で設定されていた。
　　→母に電話。降園前なのでそのままにしておき、母が対処。

　　・次の週、食前にブザー。７０で設定されていた。
　　→母に電話し、指示の下ポンプを操作し音を消す。その後食事をとるのでそのまま様子を見る。

　　・苗植え中、４５分確認していない間に７０台になりブザー。気温とテンションの高さが原因と思われる。
　　→ジュースを飲み復活。バタバタとした活動中も補助は様子を見ることを徹底していく。

初めてのポンプ使用であったが、ブザーが鳴ることは結構あり、徐々に教師が慣れてきた。音さえ消せば保育に支障はないので、そう心配せずに対応できるようになってきている。

５月　・11:00 頃に乾布摩擦をするためポンプを外した。その後つけ忘れてしまい、食事分のインスリンが出てしまってから装着。食後１時間半でＨＩ。
　　→母へ電話。状況を説明し、指示の下ポンプの操作をするが、降園時もＨＩだった。その後も様子を見ていただき。体調不良にはつながらなかったので、翌日も元気に登園できた。

６月　・プール遊び直後はあまり下がってはいなかったが、３０分後に急激に下がる。
　　→グルコースで対応し、特に問題なかった。ただし、運動後は少ししてからの方が下がりやすいことを知り、今後そのように対応していく。

　その後はこちらも慣れてきたこともあり、下がれば補食で対応できるようになり特に体調に響くような問題は起きていない。家庭でも３０～４０程度の低血糖は起こることもあり、そのような話を聞きながら怖がり過ぎずに対応している。

＜昼食時のポンプ自己操作の開始について＞

３学期が始まり、再び生活が安定した頃（１月後半）より、昼食時のインシュリンポンプの操作を本人が行うようになる。

その際の注意点は下の通り

◎前もってしておくこと

・川村ドクターとの打ち合わせを行い、指導助言をいただく。「操作のタイミング」「量」「扱い方」などの取り決めを行う。

・操作の仕方は簡単な「マニュアルボーラス」を選択。量は「２」、操作タイミングは「いただきます直後」と決め、扱い方に慣れていく。

・その指導の下、まずは自宅で朝食と夕食の時に自分で操作する経験を積んでいく。

・操作の仕方を保護者からレクチャーを受け、教師の理解を深める。

◎自己操作開始当初の流れや配慮点
・開始当初は保護者と共に確認し見守り方を見つけていくため、保護者の都合を確認しながら１週間ほど来園していただく。昼食時間あたりに来園され、保育室で操作を見守ってもらう。その後は、何かあった場合に備え、園の近くで待機してくださっていた。教師が扱い方を理解出来たら教師が操作補助をして、その様子を保護者に見ていただくようにした。保護者が確認をされ、安心して任せられると判断された時点で、保護者の付き添いをやめた。一週間程度行った。
・周りの子どもたちがどのようなことをしているのか興味をもつことが予想されたので、近くで見せ理解を深める。また、自己操作のタイミングや必要性を子どもたちにも知らせ、共に気にかけられるように指導する。
・操作をする際、必ず大人がＯＫサインを出し進めていくように決めた。
　ロック解除操作→ＯＫサイン　マニュアルボーラスに合わせる→ＯＫサイン　２．０に合わせる→ＯＫサイン　注入の決定ボタン→ＯＫサイン　終了　というように、一つずつの操作に大人がＯＫと言葉で伝えることで、自己判断でどんどん進めてしまわないようにした。
・未注入ミスがないように、操作のタイミングは「いただきます」の直後に行うように決め、食物アレルギーの除去確認と共に行うようにしていった。

◎確実に安全な注入ができるように今後気を付けていく点
・注入を確実に行ったかが分かるように、血糖値の記入用紙へ注入完了の記入をし、保護者へ送信する。
・担当教師以外の教師も操作方法が分かるように、徐々に浸透させていく。
・今後、「２．０」よりも増えていくことも考慮し、数字の感覚をつかめるよう見守っていく。

◎始めてみて分かったこと
・やはり入れ忘れが心配。しかし食物アレルギーの確認同様、教師一人ではなく必ず担任と補助の二人の二重確認をしていく。
・今まではプログラムされた時間に食事を合わせていたが、活動の時間や給食の出来上がりに合わせてに食事がとれるようになった。ただし基本は１２時前後。
・お代わりを希望した際、今まではインシュリンが足りていないが大丈夫か・・と心配していたが、お代わりの量を保護者に伝え、インシュリンの追加をすることで安心できる。
・２．０に合わせる時に、例えば２．２なら超えている、１．８ならもうちょっと、という小数点の数の概念が難しく、教師が「もうちょっと上」「下を押して」など調節しなければならない。小学生になるまでには徐々に身に付いていくと思うので、表にしたり遊びとして理解できるようにしていきたい。

今後も問題が出てくることがあるとは思うが、その都度保護者と共に考えていきたい